

国見ヶ丘

国見ヶ丘は、伝説からその名がつけられました。神話において、日本の初代天皇の孫と考えられている、建磐龍命(たけいわたつのみこと)が筑紫の国（現在の九州の北部）へ統治に向かう途中にこの地に立ち寄ったとされています。この丘の頂上から、建磐龍命は、四方どの方角からも自分が支配する全ての土地を見ることができたと伝えられています。

立地と周辺

標高 513 メートルのこの国見ヶ丘からは、有名な連山や九州盆地を見渡すことができます。東には数多くの日本神話を持つ高千穂盆地、西には日本で一番大きな活火山、阿蘇山が望めます。北には、九州山地の主峰である祖母山（標高 1,756m）がそびえ、南には、天孫降臨の地と伝えられる二上山に続く椎葉の山々が連なっています。また、国見ヶ丘の周りには、高千穂の名高い棚田も見ることができます。

雲海

9月から、11月にかけて国見ヶ丘は高千穂盆地をつつみこむ自然現象である「雲海」の名所としても有名です。丘の上から眺めると、まるで霧の海に浮かんでいるようにさえ感じます。気温差が 15 度以上で、適度な湿度を保ち無風の朝に、雲海は発生します。

民謡「刈干切唄」

国見ヶ丘から眺める秋の紅葉は、多く愛唱されている民謡「刈干切唄」と結びつきがあります。この労働歌は、高千穂地方が発祥の地と言われています。曲名は、干し草を刈り取って収穫することから名付けられています。冬季の家畜の肥料とする草を山々から刈り集めた時に唄われたものです。昔の厳しいひなびた農村生活の中から生まれた哀調のメロディーは、世代を通して唄い継がれてきました。

瓊々杵尊と国見ヶ丘

国見ヶ丘には、神道伝説において、この世の初めての統治者となったと考えられている瓊々杵尊の像があります。高千穂地方の伝説によると、地上に天下りした瓊々杵尊と一行は、深い霧の中で道を見失ってしまいました。そこにこの地に住む大鉗（おおくわ）、

小鉗（おくわ）という二人が現れて、瓊々杵尊が手に持たれている稲穂を粃にして、あたり一面にまかれるように進言しました。そうすると霧は晴れ、瓊々杵尊と一行は地上界に無事につくことができました。この像は、その伝説の場面の像です。